

よらねかね 小合

2026.3.15 第94号

発行者
小合地域コミュニティ協議会
(コミュニティセンター内)
☎0250-25-2299

発行人/井浦 博男
編集/広報文化部

地域の人口動態
令和8年1月末現在
世帯数 1,310 世帯
男 1,706 人
女 1,751 人
人口 3,457 人

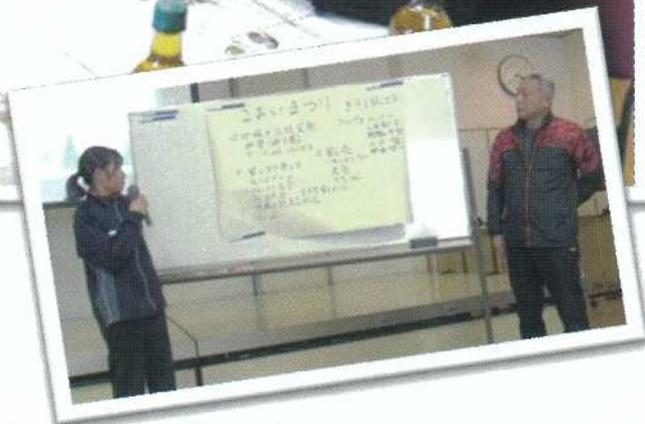
小合地域懇談会が開催されました



03 祭の活性化、奉仕活動の活性化

こあいまつり (仮称)

令和8年8月1日(土)
小合中にて



「小合地域の教育が目指す人間像」「小合中の目指す生徒像」について小合デザイナー（小合中有志生徒）を中心に小学生や大人も加わって、みんなで数カ月かけて議論してきました。その結果それらを具現化する手立てとして ○祭りの活性化 ○奉仕活動の活性化 が選定されました。

地域懇談会では、それらの思いを地域の方々と共有することを目的とし、又、既に開催することが決定している「こあいまつり」に向けて、具体的な活動の詳細について話し合いの場が持たれました。

ワクワクするようなイベントとなるよう地域を挙げて皆さんで盛り上げていきませんか。

コミ協として全面的にバックアップしていきたいと考えています。



スマホ講習会

8.2.7



スマホは持っているが、色々な機能の使い方が分からない、最新の機能を使いたい等の声が寄せられ、講習会が開かれました。個々のレベルに応じて3つのグループに分かれ LINE の設定、便利な機能、PC との連携、操作してみでの疑問等々を講師の先生から優しく丁寧に教えていただきました。



参加者全員で...



キャンドル作りから始まり、クリスマス为主题にしたクイズ大会も行われ、正解者には季節の花々や図書カードが贈られました。中学生サンタさんから子どもたちへのプレゼントもありました。一日中笑顔いっぱい素敵なイベントとなりました。



各地域のサロン活動



ロコモ体操 蕨曾根



節分豆まき 大鹿



読み聞かせ コミセン

ふれあい・いきいきサロン活動は小合地域の8つの自治会、町内会で実施されています。みんなの茶の間として、「お茶を飲むだけでもいい」「井戸端会議でもいい」「いつ来ていつ帰ってもいい」など気楽に気軽に憩える場所です。その効果として「外に出る機会が増える」「顔見知りや友達が増える」「たまに地域や生活に役立つ情報を得られる」「時には新しい発見もある」などがあげられます。地域にサロンがない方でもコミセンで定期的に毎月第2第4土曜日に開催されています。たまに覗きにきてみませんか。大歓迎してくれると思いますよ。



ボッチャ大会
8・1・25



優勝 吉田文二・吉田桂子ペア
準優勝 稲月正樹・長谷川喜和子ペア
第3位 大竹正剛・杉崎真由美ペア
おめでとうございます

当日はスポーツ振興会の主催により14チーム35名が参加し、賑やかに大会が開催されました。本格的なコートが設営され、オリンピックさながらの白熱した熱戦が繰り広げられました。

シリーズ

ふるさと小合のあれこれ

こうせん宵宮

(浦興野)

「小合の民話」より

昔、このあたりは一面の沼地でした。いつの頃からか何人かの人がやってきて、土地を耕し、小屋を建て住みつくようになると、「浦小屋」と呼ばれるようになりました。

やがて、一面に広がっていた沼地も少しずつ田んぼに姿をかえ、住みつく人も増えて、小さな村落が出来あがり、正式に「浦興野」と呼ぶようになりました。

そこで、村の人たちを守ってくれるお宮がないと困るということで、みんなで神明宮というお宮を建てることになりました。秋までに間に合わせようと人々は一生懸命働きまわした。その年の8月10日には立派なお宮さまが出来あがりました。

さっそくお宮さまをお移しする



式を行い、それが夜中近くだったので、人々はこのお宮を「宵宮（よみみや）」と呼び、毎年8月10日にお祭りをするようになりました。ところで、浦興野のあたりは、周りを信濃川や小阿賀野川に囲まれ、昔からの沼地だったため大雨が降るとすぐ大水になり、村人達は苦しい生活を続けていました。ある年の秋のことでした。降り続いた雨のため、覚路津の土手が切れ、大洪水になりました。

そのため稲は全滅してしまいました。人々は、わずかに残っている占米のくずを粉にして湯にいた「湯の子」というものを食べて飢えをしのいでいました。しかし、どんなに貧しくともお宮さまへの供えを絶やすことはできません。そこで、くず米の粉の「こうせん」をお供えし、「今年はこんなものしかおあげできませんが、私どものせい一杯の気持ちです。ごかんべん下さい」とお祈していました。

こうして、次の年もまた次の年も洪水が続き、こうせんしかお供えすることが出来ませんでした。それが、いつのまにか習わしとなつて、お祭りになると必ず「こうせん」をお供えするようになりました。そこでだれいうとなく、このお宮のことを「こうせん宵宮」と呼ぶようになりました。ところが、その後もききんや大水に悩まされる年が続きました。生活に困った村人たちは、お盆のお飾りを作って、行商に出るようになりました。8月になると毎日のように夜なべをし、お盆の前の日まで、村松、水原、新瀨あたりまでも売り歩きました。こうなるとうちのお祭りをするどころではありません。

そこで、ある年の7月末の晩、村人たちはお宮に集まって相談をし、お祭りを休むことにしました。

その夜のことで、ものすごい大あらしが村をおそいました。空はうなり、木はたおれ、家も吹き飛ばされるのではないかと思うほどの荒れようです。村人たちは、あまりのおそろしさに、ただふとんの中でおそっているばかりでした。あらしは一晚中吹き荒れました。やがて、明け方近くなった頃でした。突然、あたりが昼のように明るくなったかと思うと「ドシン パリパリ」とものすごい音がして、お宮の大杉に雷が落ちました。

夜が明けると母屋の大杉が真っ二つにさけていました。「これは、きつとお祭りをやめることにしたので、神さまがおいかりになられたのだ」「やっぱり、どんなことがあつてもお祭りは休まないことにしよう」村人たちは、さっそくお祭りの準備にかかり、いつもより盛大にお祭りを行いました。このことがあつてから、村人たちは、度もお祭りを休むことなく、今まで以上にお宮を大切にしてお参りを続けました。

『小合を楽しむ』

小合コミュニティ協議会
令和3年発行より抜粋